

平成29年度 研究活動のまとめ

1 研究テーマ

『運動の楽しさや喜びを味わう体育学習』

2 研究経過

第1回			第2回			第3回			第4回		
期日	人数	場所	期日	人数	場所	期日	人数	場所	期日	人数	場所
5月25日	31人	甲佐小	10月6日	28人	嘉島東小	11月24日	29人	広安小	1月26日	29人	御船小

3 研究の概要

(1) 研究の内容

① 研究テーマ設定の理由

小学校の体育では、「心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるとともに、健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる。」を目指している。この目標を達成するためには、児童一人一人が喜んで生き生きと取り組む体育学習を創造し、生涯にわたり運動に親しむことのできる資質や能力、態度の基礎を育成しなければならない。そこで、今年度も本研究テーマを設定し研究することにした。

また、運動領域においては、学習内容を明確にし、確実に身に付けさせるための適切な指導の在り方とし、保健領域においては「学習過程の工夫」と「ライフスキルの育成」共通の視点として、指導と評価の一体化に焦点を絞って研究を進めることにした。

② 研究の重点（学習指導要領の趣旨にもとづいた実践）

	重 点		授 業 の 主 張 点
運動領域	・ 学習内容の明確化 ・ 指導方法の工夫・改善 ・ 課題解決学習 ・ かかわりあいの活性化	一 体 化 指 導 と 評 価 の	① 教材の特性（設定理由を明確に） ② 身に付けさせたい学習内容の明確化 ③ 教師の意図的・計画的な指導 ④ 教具やルールの工夫
保健領域	・ ライフスキルの育成		① 学習過程の工夫

③ 研究の実際

ア 研究授業①（嘉島・甲佐地区）

5年「ネット型ゲーム（ボール運動）」授業者 西田 丈輝 教諭（嘉島東小学校）

児童が主体的に運動を楽しむためにルールの工夫を取り入れたり、様々な場を用意されていた。※実践報告参照

イ 研究授業②（益城地区）

5年「ネット型ゲーム（ボール運動）」授業者 北 慎一郎教諭（広安小学校）

児童の実態から、運動を楽しみと感じ、運動に親しむための工夫がされた授業であった。児童が主体的に運動を楽しむために、計画的な直接的指導（単元の指導計画と評価計画・具体的な子どもの姿・授業場面への位置付け）や仲間とのかかわりの活性化（場や教具の工夫・伝える視点の焦点化・ポイントやこつの共有化）について工夫されていた。

ウ 研究授業③（御船地区）

5年「体力を高める運動（体づくり運動）」授業者 吉村 広伸教諭（御船小学校）

児童の実態から、運動を楽しく継続して行えるための工夫や体育で学んだ運動を日常的に行う意識を高めるための工夫がなされた授業であった。仲間とのかかわりの活性化（場や教具の工夫・伝える視点の焦点化・ポイントやこつの共有化）について工夫されていた。

I T Cの活用により、自分の課題を見えるようにする授業提案であった。

(2) 成果と課題

① 成果

- ・児童の実態を考慮し、「なにを」「いつ」「どこで」「どのようにして」指導するか、計画的な指導計画が作成され、見通しを持った指導ができていた。
- ・身に付けさせたい学習内容の定着のために、教材教具の工夫や場づくり、ルールなどの工夫がどの授業においてもなされ、児童の技能の向上や仲間とのかかわり合いを深めることに有効であった。

② 課題

- ・「運動・場・人」とのかかわりの中で、さらに児童同士の言語等による対話的活動の充実を図っていく必要がある。

4 実践事例 5年「ボール運動（ネット型ゲーム）」授業者 西田 丈輝 教諭

(1) 授業研究会の概要

【自評】

ゲームを通して、「1回目をキャッチしない」「場所は自由に動いていい」等、子どもたちの意見を基に、ルールの工夫を行った事で、ゲームへ生かせるルールづくりが行えた。

第3次までは声が出ていなかった児童に対し、直接的指導を行った事で、チームの中で友達とかかわりをもって運動を楽しむ姿が見られた。

【質疑応答及び協議】

①Q：ルールを作る過程、ルール作りについて教えてほしい。

A：「つなげる」ということを中心にしてルールを作った。

4回で返す・・・絶対に一人一回は返す。

キャッチOK・・・苦手な子どもがつなげることができるように。

今のルールについては子どもたちと考えた。

②Q：キャッチが良い理由と今後、キャッチはようになっていくか。

A：「苦手な人もいるからキャッチはありにしておきたい」という児童の声があった。

今後もキャッチありで行っていきたい。

③Q：タスクゲームのルールが毎時間変わっているが、児童の反応としてはどうだったか。

A：第2時から第3時にかけてタスクのルールが大きく変わるので戸惑いもあった。

④Q：スイッチオンタイムの箱キャッチのねらいを教えてください。

A：スイッチオンタイムは、コネクティングゲームに楽しく入れるようにというねらい。

⑤Q：チームの中での児童の役割が決まっていたが、作戦を立てたりすることはこれまであったのか。

A：作戦タイムをとったことはこれまでない。自分たちでゲーム中に話し合っていて決めている。

⑥Q：赤チームはサーブで来たボールをワンバウンドで返していたが、それもOKか。

A：サーブの返球も1球目はバウンドしてOK。

⑦Q：全員が触れていたから楽しそうにしていたのだと思う。

次時からは、ルールを選ばせていくと思うが、これだけは教師側で決めておきたいというルールがあれば教えてください。

A：「ボールを必ず4回で返す」というルールは変える気はない。みんなで触れるようにする。

【班別協議】

- ・スイッチオンタイムの道具が工夫されていた。段ボールの穴あき。
- ・全員がボールに触るということで意欲的に全員参加できる。
- ・抽出児童がよく声が出ていた。振り返りシートもすべて◎だった。
- ・ルール作りを子どもと行っていることがいい。
- ・運動量が十分確保されていた。
- ・「どんまい」の声掛けなど支持的風土のある学級づくりがされている。

【助言・まとめ】

- ・子どもの側から授業をつくっていかうという考えが大切である。
子どもたちに聞くと「ゲームがしたい」という。ゲームをしていく中で、自分たちで課題を見つけ、練習内容を選ばせて、試合をする。「自己決定」がキーワードである。
- ・子どもたちが本当にそれを必要としているのか、本当に楽しいと思っているのか、を考えることが大切である。
- ・主体的とは、児童が選ぶものと教師が指導するも内容のバランスを考えなければならない。

(2) 学習指導案（一部抜粋）

第5学年 体育科学習指導案

平成29年10月6日（金）

場所 体育館

指導 嘉島東小 西田丈輝教諭

① 単元名 「つないで、つないで、きめよう！コネクティングゲーム」

（A ボール運動 イ ネット型ゲーム）

② 単元について

ア 運動の特性

- ・ソフトバレーボールは、2つのチームがネットで区切られたコートの中で攻防を工夫して組み立て、ボールを打ち返し、得点を競い合うことが楽しい運動である。
- ・コートがネットで区切られており、攻守がはっきり分かれているため、連係プレーによる攻や相手に合わせた守備など自分たちで立てた作戦をゲームで反映させやすい運動である。
- ・特徴を生かした攻撃や守備の作戦を考えたり、仲間と協力し合い、助け合ったりすることでチームワークが高まり、集団的達成感を味わうことができる運動である。

イ 児童の実態（男子11名 女9名 計20名）

○運動について

- ・バレーボール（ソフトバレーボールを含む）をクラブチーム等で習っており、経験のある児童は男子0名、女子1名とバレーボールに慣れ親しんでいる児童は少ない。児童の技能についての実態を把握するために、事前にソフトバレーボールを行い、本単元で行うレシーブ・トスの観察を行った。レシーブに関しては、13名の児童がふわりとしたボールをあげることができたが、7人の児童は腕に当たるが、横にすぐ落ちてしまったり、直線的な強いボールになってしまったりしていた。ふわりとしたボールをあげることができた児童の中でも、まだきちんと相手に返すことができていない児童もあり、個人差が大きいことが分かった。

○態度について

- ・指導者自作アンケートの結果によると、「ボール運動は好きですか。」という質問に対し「大好き」「好き」と答えた児童が18名であること、「バレーボールは好きですか」という質問に対し「大好き」「好き」と答えた児童が16名いることから、運動に対する興味関心は高いと言える。一方、「嫌い」と答えた児童が1名いる。理由は「ボールが思ったように動かないから」というボール操作に対しての不安があったようである。この結果から、バレーボールの技能であるトスやレシーブなどの基礎的・基本的な技能の定着を丁寧に行っていくことが必要であると考えた。

○思考・判断について

- ・アンケートの結果によると、本学級の児童はどうしたら上手くいくか考えながら運動に取り組んでいる児童は多いが、友だちのいいところを見つけたり、チームで作戦をたてて運動に取り組んだりしている児童は少ない。この結果から、児童同士の交流の活性化を図るための手立てが必要になると考えた。

ウ 指導上の留意点

○指導計画と評価計画の作成について

- ・基礎的・基本的な技能を向上させるために、ドリルゲームを単元を通して帯状に設定する。
- ・評価をより具体的な子どもの姿で描き、指導と評価の一体化を図る。
- ・単元の前半でソフトバレーボールの基礎的・基本的な技能の動きやゲームのルールを確認しながら、安全に運動ができるようにする。単元後半では、それらの技能やチームの特徴に合った作戦をたて、ゲームを行い、単元の最後には「嘉島東 バレーボール大会」を設定する。

○授業づくりについて

- ・基礎的・基本的な技能の動きのポイントを一斉指導する場面を設定し、児童が正しい運動の行い方や動きのポイントを絵や言葉で示し、理解できるようにする。
- ・児童の実態に応じてラリーを続けたり、チーム全員がボールに触れる機会を増やしたりするためにボール操作の制限を緩和する。
- ・学習カードを活用し、児童がめあてを持って行動し、自己評価することができるようにする。

③ 単元の目標

- 運動の楽しさや喜びに触れ、簡易化されたゲームで、チームの連携による攻撃や守備によって、攻防をすることができるようにする。《運動の技能》
- 運動に進んで取り組み、ルールを守り助け合って運動をしたり、場や用具の安全に気を配ったりすることができるようにする。《運動への関心・意欲・態度》
- ルールを工夫したり、自分のチームの特徴に応じた作戦を立てたりすることができるようにする。《運動についての思考・判断》

④ 本時の学習

ア 本時の目標

次の人のことを意識してボールをあげることができる。【運動の技能】

イ 展開

過程	時間	学習活動	指導上の留意点・評価	備考
導入	10分	1 準備運動をする。 2 場づくりをする。 3 スイッチ オン タイムをする。	○場の安全を確認する。 ○それぞれの練習場所を回り、声掛けをする。	タイマー
展開	30分	4 めあてを確認する。 【めあて】 次の人にボールを上手につなぐコツを見つけよう 5 タスクゲームをする。 【2対1】 ・キャッチあり。2度目 ・バウンドなし ・3回目で返す。 ・ボールをあげたら入る。 ・3回目を返した人が ぬける。 6 ゲームをする。 	○次の人に確実にボールをつなぐために大切なことは何かを考えさせる。 能動型学習のポイント ◎児童が能動的にタスクゲームに取り組めるように、ルールを掲示して視覚的な支援を行い、練習の目的を明確にする。 徹底指導のポイント ◎次の人のほうに体を向けたり、声を出したりしているか積極的に直接的指導を行う。 ○本時のめあてを確認し、学習した動きを意識しながらゲームに取り掛かることができるようにする。 〈評価〉【技能】 次の人のことを意識してボールをあげることができる。（観察） 《具体的な子どもの姿》 次につなぐ人に声をかけたり、次の人を見たりしてボールをあげている。	コミュニティボード
まとめ	5分	7 学習のまとめをする。 8 片付けをする。	○本時の学習を通しての感想などを学習シートに記入し、数名発表をさせる。	学習シート